



3月に入り入会者が次々と！仲間を増やし活発な江東民商を！！

3月に入り、新たな会員が8名誕生しています。

支部別では、北大島1人・北砂1人・南砂1人・深川北1人・東陽町2人という内訳です。入会のきっかけは、会員の紹介がほとんどですが、江東民商のホームページを見て入会した人もいます。入会理由は全員が税金相談という内容です。

新たな会員を迎えた支部では、歓迎会を開くなどして、民商の魅力を伝えるとともに、支部活動の活性化を目指していきましょう。まだ入会者のいない支部はなんとしても新たな仲間を迎えましょう。

春の運動は3月末まで続きます。3月の仲間増やし目標は、会員で15人となっています。残り9人の仲間を増やすために、最後の最後まで積極的な行動をお願いします。

江東民商の拡大統一行動日は3/27(金)・3/28(土)の2日間です。支部ごとに具体的な行動計画を作り、この2日間は仲間増やしのため全力を尽くしましょう。



「消費税率を5%に戻し、増税中止を求める請願」署名を集めきり、要求運動の推進を！

現在、江東民商で集めている「消費税率を5%に戻し、増税中止を求める請願」署名は、2017年4月に予定されている消費税10%の増税を中止を求めるとともに、消費税を5%に戻すことを求める内容です。

消費税率が8%に上がったことで、中小商工業者の負担は多大なものになっています。26年度の確定申告でも、税率が8%に上がったことで消費税の支払いが増え多くの悲鳴が聞こえてきました。

低所得者ほど負担が重くなる消費税は悪税そのものです。この署名を集めきり、増税反対の運動を盛り上げることで、私たちの想いを国会に届けましょう。

そのためにも、全会員の署名はもちろん、まわりの知合いにも広げ抜きましょう！



映画チケット販売のお知らせ

全国商工新聞(2/2付)で紹介された映画「山本慈昭 望郷の鐘～満蒙開拓団の落日～」のチケットを扱っています。監督の山田火砂子さんは新宿民商の会員です。当日券1800円のところ、民商会員には特別価格1000円で提供します。問い合わせは事務局まで。

会場
江東区総合区民センター・
レクホール(2階)

開演日時
3月27日(金) 14:00
4月1日(水) 14:00
5月1日(金) 14:00
(各回で山田監督の挨拶あり)

この映画に関連して、江東民商会長の満州引き揚げ体験のインタビューを裏面に掲載しています。ご覧ください。

無料法律なんでも相談会のお知らせ

江東民商では、毎月第4水曜日に東部法律事務所の弁護士による法律なんでも相談を行っています。相談は無料です。法律のことでお困りの方はお気軽にお越しください。

次回 3月25日水曜日13:00～16:00 場所 江東民商事務所1階

※当日、相談にお越しただく方は事前に江東民商にご連絡下さい。





戦後70年特集 今語り継ぎたい歴史の真実を

満州からの引揚者 江東民商会長 上原護さん(75歳)

生き残れたのはただの偶然 加害者だった事実を伝えたい

江東民商会長の上原さんは、戦前日本が満州に打ち立てた傀儡(かいらい)政権の国、満州で生まれ育ち、戦後家族とともに引き揚げてきました。最近までそのことを公の場で語ってきませんでした。歴史の真実が歪められようとしている今、実際にあったことを伝えていかなければと語り始めました。

私たち家族6人は全員生き残って帰ってきました。今まで引揚者であることを語らなかったのは、家族を失い、残留孤児になった人の中で、後ろめたい気持ちがあったからです。当時、新京(今の長春)に20万人とも30万人とも言われる日本人がいて、戦後はチフスに罹ったり、現地人からの略奪にあたりしていました。私たちが生き残って帰れたのは、ただの偶然が重なっただけなのです。

●新天地を求めて

父が満州に単身渡ったのが1930年前後。日本では祖父の代から始めた印刷業を手伝っていましたが、次男だったので新天地に希望を求めたのです。現地の日系印刷会社に勤め、1940年代最初には独立し、実兄の家族も呼びよせていました。私たちが住んでいた新京は、関東軍や満州鉄道の特権階級が多く住み、レンガ作りの共同住宅には電気、ガス、水道なども通っていました。

父は夜遅くにマーチョと呼ばれる賃馬車に乗って帰ってきました。取引先の接待だったのだと思います。冬期には子どもたち4人は毛皮のコート、毛皮の帽子を身に着けていました。中国人は綿入れを着ていた時代です。私も小さいながら、映画やデパート、中華料理店に連れていってもらいました。

●重なった二つの幸運

1945年8月敗戦直前に、父もその兄も現地で召集されました。終戦時には家の前にあった憲兵隊司令部がもぬけの殻になっていました。6、7月頃には、関東軍の戦車部隊が大量に隊列を組んで移動していったのを記憶しています。今考えれば、あれは敗戦を察知して早めに引き揚げていったのだと思います。

母子家庭同士で話し合い、朝鮮経由で帰ろうという話もありましたが、母は「私は動かない。お父さんが帰ってくるまで待つ」とがんばりました。これが幸運のひとつでした。後に朝鮮に向かった人の中には途中で行き倒れ、日本に戻れなかった人も多かったのです。

父は敗戦後ソ連兵につかまり、シベリア行きのくじ引きにあたってしまいました。しかし兵役検査の乙種だったため、体格の良かった甲種の人が見かねてか、「自分が変わってあげる」と身代りになってくれたのです。シベリア行きになれば生きて帰れなかったかもしれません。これが幸運の二つめです。

●立場が逆転した戦後

父が新京に帰ってからの1年間は、豆腐を仕入れて街に売りに行ったり、内戦を再開した八路軍や国民党軍の使役(肉体労働者)をしたりして、どうにかお金を得ていたようです。これまでと立場が逆転したのです。最後はうちにあるものを売ってお金を稼いでいましたが、46年に入ると食事は1日2食になっていました。

ソ連軍も攻めてくるというので、家の前の塀を2メートルくらいまで高くしました。隣家と床下をつなげて逃げられるようにもしていました。我が家にもソ連兵が2回入ってきましたが、幸い乱暴されることはありませんでした。時計、カメラ、宝石などを渡せばおとなしく帰って行きました。今思えば、ソ連兵から暴力を受けず、現地人からの略奪にも合わなかったことは、単なる偶然にすぎません。

1946年7月、とうとう日本に戻る時が来ました。列車は、石炭などをバラ積みする屋根のない無蓋車です。雨が降ってきても逃げることもできずに、傘も飛ばされてしまって、バナナカステラがダメになった悲しい気持ちを覚えています。3、4日で葫蘆(コロ)島にたどり着き、貨物船で博多まで戻ってきました。母は結核に罹っていましたが、病人だからと置いてこなくて幸いでした。とにかく全員で日本に戻ることができたのです。

●語れる最後の世代

戦争中、生きるか死ぬかは、紙一重です。もしも父がシベリア行きになっていたら、もしも母が新京を離れる決意をしていたら…。すべて幸運だったとしかいいようがない。70年代、80年代に残留孤児が肉親捜しに来日するたびに、私はテレビに映る彼らをまともに見ることができなかった。同じ場所において、私はこうして日本に戻ることができた。私よりもっと小さい子たちが、足手まといになる

60年安保反対闘争の中で様々なことを学び、日本が加害者だったと認識しました。戦後平和教育は、東京大空襲や広島・長崎の原爆など被害者の立場を教えてきました。しかし戦後70年の首相談話から侵略の文字が消されるかもしれない今こそ、加害者であった事実を伝えなければと思っています。私たちが語れるぎりぎり最後の世代です。自分の残りの人生では、過去の日本やアジアで何があったかを伝えていきたいと思っています。



2005年5月 長春駅 60年ぶりの故郷にて